

2004 年度 学会奨励賞 選考結果と受賞の言葉

第 6 回学会奨励賞授賞理由

学会奨励賞選考委員長 棚瀬孝雄

第 6 回（2004 年）学会奨励賞は、著書部門で、河合幹雄会員の『安全神話崩壊のパラドックス:治安の法社会学』に授与されました。

本書は、世界一治安がよいと言われた日本社会で、近年、急速に人々の体感治安が悪化するようになった原因を実証、理論の両面から分析したものである。まず、犯罪統計の丹念な分析によって、日本で、犯罪が実際に増加したわけではないということ、犯罪認知件数の増加は、逮捕訴追の見込みのない事件は報告しなかったり、強盗や強制わいせつ事件の定義をより厳格にした結果であることを明らかにしている。にもかかわらず、犯罪への不安が高まり、安全神話がもはや維持できなくなった理由を、本書は、犯罪の世界と日常の世界とを仕切っていた境界が崩壊したことに求めている。繁華街の夜という犯罪の多発地帯と、一般の居住地が隔離され、後者で安全神話が維持されていたのが、犯罪が郊外に広がり、また少年も警察に補導されることなく、夜、繁華街を徘徊するといった現象が起きて、犯罪との偶発的接触を人々が強く感じるようになったとされる。また、犯罪者も、刑事処罰を経て、日常世界から排除されるが、その後、社会に復帰するときも、地域に保護司や、マージナルな職業、時にはやくざまでが受け皿として存在することにより、日常世界から仕切られた世界の中で生活を支え、再犯を抑えてきた。しかし、ここでも、こうした二重性が、ウラの世界を許さない一般的な意識や、地域に根を下ろした活動の一般的困難から崩壊し、孤立した犯罪者が、日常世界の中に紛れて存在するという現象が出てきている。

著者は、こうして安全神話崩壊のからくりを解き明かすことにより、コミュニティ解体による犯罪の増加といった単純な説明を退けるとともに、日本の社会が伝統的に持ってきた犯罪統制のメカニズムを示して、その中から、現代にも活用できるものを見つけ出そうとする。それは、中立的な国家と普遍的な法という近代の規律権力だけではなく、その上に、著者が「現場の鬼」と呼ぶ、人間的情熱を持って、犯罪者と一対一の関係で向き合う刑事や、社会に居所をなくした者を世話する保護司のようなパーソナルな関係が付加されたハイブリッドな刑事司法である。また、そうした関係性を培養するものとしての、道徳が語れる共同体がそこには必要である。

このように、本書は、客観的なデータに基づいて通説的な犯罪現象の説明を論駁し、代わって、これまで日本で安全神話が維持されてきたメカニズムとその崩壊を多くの事例を通して説得している。背後

には、著者の長年 にわたる研究に加え、刑事司法関係者との実践課題への取り組みがある。時に、他人の意表をつくような大胆な 仮説を述べることも多く、その裏付けがなされているの か、不安に感じる読者もいるかもしれないが、そこには、 こうした「現場」を見てきたという自負があると思われる。

以上、厳密なデータに基づく推論と、現代を読む大きな図式とを巧みに融合させた本書は、社会の法現象を観 察し、そこから法則性を発見するとともに、その成果を実践的な解決として社会に返していく、法社会学の最良 の実践として高く評価するものである。

なお、論文部門での受賞作はなかった。

受賞の言葉

受賞の言葉——第 6 回 学会奨励賞（著書部門） 河合幹雄（桐蔭横浜大学）

2005 年 5 月、昨夏出版した「安全神話崩壊のパラドックス：治安の法社会学」によって、日本法社会学学会第六回奨励賞を受賞した。私にとっては、年齢制限ぎりぎりでの受賞であった。様々な分野に手を染めながらも、自分自身を法社会学者と自己認識している者として、大変な喜びであった。

苦労したといえば、部分的な問題ではなく、全体として、個人主義を肯定的に見るのか否定的に見るのかといった方向性の統一がはかれず、長年、論文は書けても、著書が出せないままであった。また、研究者として、誰に向かってどのようなスタンスで発表するのかについても、決めかねていた。結局、統制する側と距離を置かずに、統制側の視点も取り入れて、その実際のやり方を、まず、他分野も含めた知識人層に伝え、最終的には、一般市民にも知ってもらうという方向性を決めた。刑事司法分野は、伝統的に秘密主義で、実証研究者にとっては、研究困難であった。良くも悪くも、伝統的手法が維持できなくなり、大幅な見直しが必要な状況のもと、秘密主義をやめていこうという動きがある。その中で、一役になっていこうと考えている。唐突に、真実を発表すればよいというものではなく、どのような媒体でどの程度まで語るか、微妙な判断に迫られながらも、できるだけ、実態を多くの人々に知ってもらう方向で精進したい。

理論的な面では、地域共同体の重要性を、古い道徳に先祖がえりせずに、再構築していきたい。具体的には、高速移動、大量通信が可能な社会における、新しい共同体のあり方ということになる。政策提言までもっていくつもりで頑張りたい。